

*****目次*****

- P1 今号の TOPICS 西村 彦二
 P2 仲間たちの近況報告 (1)
 1 班 今本 芙佐子
 2 班 濱田 嵯智子
 P3 仲間たちの近況報告 (2)
 3 班 華崎 律子
 4 班 村田 玲子
 P4 リレー随筆 吉川 時子
 自由コーナー 九津見 明
 P5 私の玉手箱 藤田 憲治
 P6 樹形ウォッチング遊上 眞一
 P7 絵画コーナー 岩城 正大
 俳句コーナー 谷坂 修二

◇自然と文化だより◇

30 号に投稿頂いた皆様、有難うございました。

30 号ということは年 4 回発行です。7 年余継続したことになります。過去のファイルで確認しますと、第 1 号は全 4 ページで、その後徐々に増え、最近では 7~10 ページです。「リレー随筆」は 5 号から、「私の玉手箱」は 9 号からスタートしています。

俳句、絵画等は初期からありましたが、最近は参加される方が減少する傾向にあります。

今後、より多くの方の参加しやすい仕組みをつくっていかねばと考えています。

N.A



今号の TOPICS 新専任幹事のご挨拶

全科員参加の社会貢献活動を目指します！

社会貢献専任幹事 西村 彦二

自然と文化科に入れていただいて 7 年目になります。1 年目が班長、2~4 年目が総務の専任幹事、5~6 年目が会計監査を務めたのでそろそろお役御免かと思っていたところ、溝部代表から社会貢献の専任幹事の要請がありました。何人かに断られて“最後の望み”なのかと思い、お引き受けした次第です。就任早々に前任の飯田さんから大阪ガスグループ福祉財団から受託の「健康のつどい自然観察会」が 12 月まで 7 回開催されること、4 月（長居植物園）と 5 月（渉成園）の準備を早めに進めるようにとの引き継ぎがありました。詳細な引き継ぎ書があり何とかかなりでしたが、4~5 月は資料作成に追われる毎日でした。7 月（城陽）の観察会からは、長野副代表、古荘幹事、松堂幹事に観察会の統括と資料作成を分担していただくことにしました。社会貢献委員は、担当の副代表を入れて 24 名の大所帯です。委員会発足以来の大ベテランもおられ、何でも相談できるので私のような社会貢献活動初心者でも何とかやっていけるかなあ…？

今年度の当科の事業計画に「新規の社会貢献活動を推進する」とありますが、昨年度はタイミングが悪くお引き受けできなかった東大阪市立小学校の出前学習会を、今年度は受託する方向で検討を進めています。240 名の小学 1・2 年生を対象にした自然観察と工作のオーダーが来ています。社会貢献委員だけではなく、自然と文化科の全員が参加するような方法を考えていると思っていますので、ご協力のほどよろしくお願いします。



4/26 長居植物園（リーダーとスタッフの皆さん）

舞台に表現された自然

1 班 今本 芙佐子

昨年、高等科で吉野川（奈良県）に地層の観察に行った。吉野川を挟んで妹山、背山がある。ここは歌舞伎（文楽）の「妹背山婦女庭訓（いもせやまおんなていきん）」の3段目（吉野川の段）の背景である。実際に見ると、何の変哲も無い小さい山であるが、これが文楽や歌舞伎の舞台になると、全く違う景色になる。

文楽で初めてこの芝居を見た時、その舞台の美しさと装置の素晴らしさに感動した。劇場全体を舞台に見立てて、正面の舞台の両側に妹山と背山があり、その真ん中を吉野川が流れている。その川は水車仕立てで、クライマックスには水車が回り、川が流れているように見える。妹山、背山の麓には敵対する二つの家があり、そこには息子と娘が居り、二人は結ばれることのない恋人同士（日本版のロミオとジュリエット）である。周りは全山桜の花盛りである。水の青色と桜のピンク色が引き立て合い、この美しい舞台で悲劇が上演されるのである。

歌舞伎や文楽には、それぞれ色々な土地が出てくるが、これは有名な吉野の桜をうまく背景に使った作品である。

吉野と言えば、歌舞伎三大名作の一つである「義経千本櫻」が有名である。狐忠信（狐が家来の忠信に化けている）と静御前が、頼朝に追われて吉野山に逃れている義経を訪ねて行く道中の「道行初音の旅の段（踊り）」では、一面の桜の吉野山が舞台である。

次の義経と静御前の対面の場も、最後に敵に追われて義経が逃れていく立ち会いの段でも桜が満開である。背景が美しいと、その悲劇性がよけい引き立つ様に思われる。

このように歌舞伎や文楽ではよく桜が出てくる。「祇園祭礼信仰記」では桜の木に縛られた雪姫（雪舟の娘という設定）が桜の花びらでネズミを描き、そのネズミが縄を切って姫を助ける。

また、「山門」の石川五右衛門と秀吉の対面の場も、ひどく派手な山門の上で、五右衛門が満開の桜を眺めている。その舞台の美しさには息を飲むばかりである。

文楽や歌舞伎を敬遠している方にも、理屈を抜きにして、そのような舞台の美しさを是非味わってほしいと思う。

タイ植樹・交流ツアーに参加して

2 班 濱田 嵯智子

6月23日～30日、みどり大阪主催のタイ植樹・交流ツアーに参加した。目的は、中野穂積さんのルンアルン（暁の家）プロジェクトの支援である。初めて行ったのが2012年。たった4年のうちにタイ情勢もずいぶん変わった。もともと学校に行けない北部山岳地帯の中高生支援の寮としてのプロジェクトで、4年前には寮生も60名ほどいて、夜の交流では劇あり、歌あり、民族舞踊ありと活気にあふれていたが、今では数名の奨学生のみで、軸足を山岳地帯の有機農業の支援においている。

24日、バーンメーワン校での植樹と交流。ここは4年前にも訪問しているのでなつかしかった。生徒の半数はビルマからの移住者の子ども達だとか。このあたりはリゾート地で職を求めて国境を越えてくる人たちが多いらしい。植樹後のスコールは半端ではない。まるで滝だった。折り紙の交流も楽しく、子ども達の笑顔がすてきだった。



25日、4 駆に乗り込み、いよいよ山岳地帯の植樹に。雨期のはしりで道はぬかるみ、谷へ落ちてはいけないうので途中から徒歩で山へ入る。（やっぱり、ヒルは出た！）バナナの葉で包んだおにぎりとソーセージとゆで卵で腹ごしらえをし、植樹開始という時にまたスコール。小降りになるのを待って植樹。今回はコーヒーとアボガドの苗。4年前は禿山だった斜面にコーヒーがすくすく育ち、丸々した実をたわわにつけていた。暁の家の卒業生が山にもどり、頑張っているのを物語っていた。



その夜、山の村で見た満天の星は今も目にやき付いている。人も犬もネコもニワトリもみんな村の自然に溶け込んでいた。山の向こうから昇る太陽は雲をさまざまな色に染め、輝いていた。忘れかけていた「大切なもの」に出会った旅だった。

念願の成が島に上陸

3 班 華崎 律子

7 月 26 日ついに念願の成が島に上陸できた。昨年は晴天なのに海が荒れて渡れなかったからだ。

わずか 3 分くらいの乗船で到着。着いて本当にびっくりしたことがたくさんあった。

①ハマボウとハマゴウの生い茂る島だった。

特にハマボウがマングローブのように繁っていた。ハマゴウは島の至るところにあってまるで雑草のようだった。



雑草のようなハマゴウ



ハマボウの幹

②生き物のあふれる島だった。

びっくりしたのは前日の夜、アカウミガメが産卵してって、そのあとを見られたこと。そして、木の根元に群がるアカテガニの子ども、石垣などには、いっぱいアカテガニ、ベンケイガニがいた。



アカテガニ



ハマナタマメ

③希少な植物

私にとって初めて見る海浜植物がたくさんあった。ハマナタマメ、ハマボス、ハマサジ、ハマナデシコ、ハマユウ、ハマダイコンは花を見ることができた。さすがに海浜植物だけに皆「ハマ」がつく。ほかに、希少なハママツナの群落、自生タマシダ、イネ科のアイアシ、コナミキを見た。ハマゼリは苦く、オカヒジキは塩味がきいておいしかった。

こんなに貴重な自然が残っていることが不思議でもあった。しかし、案内をしてくださった方たちの成が島を大切にしたいという強く深い気持ちはよく私に伝わった。また、季節を変えてぜひ訪れてみたいと思った。

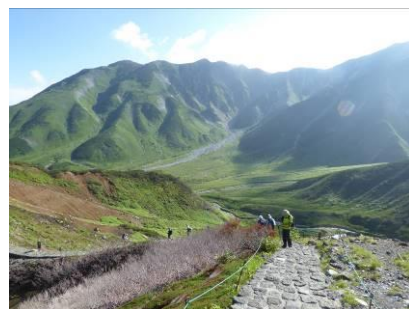
室堂平で憩う

4 班 村田 玲子

このところ時々襲う膝痛が恨めしい日々だったので、22 時間室堂滞在！自由散策！のバスツアーで室堂平お気楽ハイキングを楽しんだ。

室堂は、ターミナルの雑踏と、雨、霧で出迎えてくれた。徐々に雨も上がり霧も晴れ、ハイマツと次々に現れる花々に胸キュン。

地獄谷を見下ろすエンマ台を過ぎる辺りから硫黄の匂いが鼻を突き、リンドウ池から宿の雷鳥荘まではハイ



マツは枯れ、コバイケイソウ、アオノツガザクラも体の半分は茶色く爛れた哀れな姿だ。一帯は風向きにより強い火山ガスの通り道となり、不毛に近づく世界を呈していた。東日本大震災以降、火山ガスの噴出が活発になってきたとも聞き、地獄谷への道は 23 年度から通行止めとなっている。幸運にも夜は風向きもよく、ガス中毒で倒れることなく星空を観る事が出来た。奥大日、別山、立山方向は雲間だったが、浄土山より南と天頂は幼いころ見た夜空そのままだった。



翌日は室堂

山へ、のんびり散策。雷鳥遭遇は無いものの、チングルマがこんもりと島の如く咲く様、ハクサンイチゲ、コイワカガミの咲き終わりに間に合い、沢山の花々と巡り会えた。

若い頃の立山から薬師への山行は「歩くことが喜び」だった。今は「植物や自然と知り合いになる」のが喜びになった。



ステンドグラスの歴史

1 班 吉川 時子

世界でステンドグラスが発明されたのは6世紀ごろとされています。鉄パイプの先に溶かしたガラスを板状のガラスに成形して、その色とりどりのガラスを図柄にカットし、H型の鉛のレールでガラス同士を組み合わせる技法です。その技法は多くのヨーロッパの教会において（当時は字が読めない人々が多かったので）聖書の一部を図案化してビジュアル的に見せ、その透過光によって教会自体が荘厳な雰囲気をかもし出すために発展していきました。

日本に初めてヨーロッパからステンドグラスが導入されたのはなんと19世紀です。長崎の天主堂に「十字架のキリスト」がフランスから寄贈されたのが始まりです。

そして明治政府の推進する技術留学でドイツ・ベルリンに留学した宇野澤辰雄が帰国後ドイツ式ステンドグラスを完成させ、東京府庁舎の天井に明り取りとした作品が日本人によってなされたステンドグラス第1号です。

相次いで遅れることわずか1年後、東京美術学校で日本画を学んだ小川三知がアメリカに留学してアメリカ式のステンドグラスを紹介しました。これは「ティファニーテクニック」といわれ、19世紀末にルイス・コンフォート・ティファニー（宝石商として有名なティファニー家の2代目）が編み出した技法で、ガラス片にテープ（コパーテープ）を巻き、ガラスとガラスをハンダ付けで繋げるものです。これにより今まで平面でしか表現できなかったステンドグラスを立体造のランプやスタンド、パネルなどの室内装飾の分野に変えることができ、趣味としてのステンドグラスが普及されたのです。小川三知の作品は今もたくさん残っていますが、個人邸に収めた現在の「鳩山会館」等が有名です。宇野澤辰雄、小川三知によって扉が開かれた日本のステンドグラス技法とその精神は絶えることなく引き継がれ現在に至っています。

私もステンドグラスのガラスの美しさと映り込みに魅了されて、その製作を楽しんでいます。「花と二匹の可愛いリス」の三角柱ランプの作品(右写真)は最近のものです。



私の火木土

4 班 九津見 明

私は、2003年3月にサラリーマン生活を終了し、翌月の4月にシニア自然大学(※当時名)に入りました。

「自然」という言葉と全く関係のない環境の中で人生の半分以上を過ごした私には、自然大学の生活は正に新鮮そのものでした。毎週月曜に弁当を持って出かけるなど想像もしなかった事でした。講座部から高等科へと次第に面白さが膨らんで来たものです。しかし、高等科在籍中に突然に当時の代表理事から「地球環境生態系講座を発起するように」と言われてから、精神的な重圧？により胃潰瘍を約30年ぶりに経験しました。

生態系講座の重圧を背負いながら2005年4月に自然と文化科(自文科)に入科し、楽しいながらも多忙な日々が始まりました。生態系講座の担当は3年間で外れましたので、以後は自文科の活動に軸足を移しました。自文科5年目の12月に事情により2週間ほど入院しました。私の生活パターンが変わったのはその退院直後からでした。

私には現役時代から、毎週、月曜と水曜には決まった予定があり、金曜は自文科ですが、火・木・土曜日は、優先の予定がない限り近くのスポーツジムに行くことに決めました。目的は、体重の減量と健康維持です。4班の西田さんは既に加わっていました。

ジムには、マシーンルーム、プール、スタジオなどで色んな課目がありますが、私が積極的に参加していますのは、ステップ、エアロビクスとリズムに合わせてバーベルを持ち上げるラジカルパワーというプログラムです。楽しんで参加していますステップには、「簡単ステップ・40分間」と、「ステップアップステップ・45分間」があり、エアロには、「簡単エアロ・45分間」と、「シェイプアップエアロ・45分間」があります。

他には更に上級で動きの速いプログラムもありますが敬遠しています。私が参加するプログラムは初級者と中級者の中間プログラムが主で、偶に中級相当にも入ります。多い日にはスタジオプログラム4本に参加し、そんな日は朝10時から午後3時くらいまで動いています。少し難しいプログラムへの参加者は殆ど女性です。数少ない男性群の中で私が最年長と思われます。

運動を終え入浴し帰宅後のビールは格別で、これが楽しみでのジム通いなのかもしれません。

産毛の話

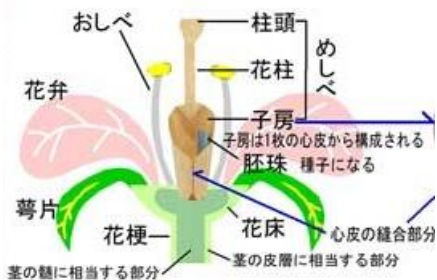
4班 藤田 憲治

Ⅰ. バラ科サクラ属の産毛



モモ、アーモンド、ウメ、スモモ、サクラ、これらサクラ属の果実には片方に薄い筋が入っているのが解らなかった。それと、ウメやモモは枝に直接花が一つ咲き果実も一つ出来るが、サクラやスモモは一つの冬芽から数個の花が咲き、果実も数個出来、長い果柄がある。モモやウメは果実に産毛があるのにスモモやサクラにはない。

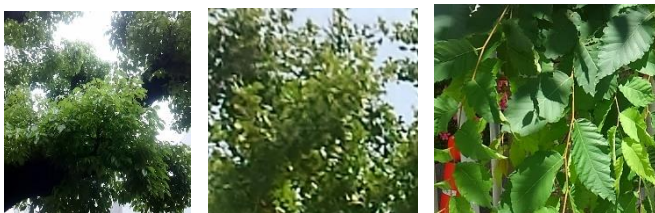
公開講演会の講師の女性教授に休み時間に尋ねたが、「花式図が一緒でしょ」で終わってしまった。属が違うのではないかと考えていた。APG 体系がでて来たのでそのうち解るだろと思っていた。薄い筋が入っているのを科内の人々に聞いたが只一人、井上信子さんが「心皮」と答えてくださった。めしべを作る単位として心皮という特殊な葉があるというのを高等科あたりで習ったことがあ



った。その心皮の縫合部分の名残らしい。サクラ属に関しては APG では広義と狭義に分かれて

いて、まだ学者間でも議論されており統合されたり分離されたりしていくらしい。モモはサクラ属モモ亜属、ウメはサクラ属スモモ亜属、サクラはサクラ属サクラ亜属らしい。

Ⅱ. 大木の産毛



左は公園のクスノキが思いっきり剪定されたもの。真ん中は御堂筋のイチョウがこれも思いっきり剪定されたもの。右は近くの企業の敷地内でケ

ヤキが剪定されたもの。クスノキ、イチョウは産毛のように細かい

葉っぱを無数に出して光合成を行い、花を咲かせて実を付け、根にも栄養を送ろうとしている。かたやケヤキはストローのような細い枝を伸ばして、サクラの葉よりも大きな葉を付け、こちらは面積を大きくして光合成をしようとしている。いろんな生き方があるものと思った。クスノキやイチョウがどのようにして枝を殖やしていくのか観察したいが樹が高すぎて無理。ケヤキはその後、枝にルチンが蓄積されて木化現象を起こし、枝が立ち上がって本来のケヤキの形に近づいて来た。

朝の散歩のおり、毎回同じコースを歩くのは面白くないので大阪市中央区と西区の街路樹を調べてみようとした。結果、ケヤキは一本もなかった。イチョウ、クロガネモチ、ヤマモモ、クスノキ、ユリノキ、シラカシ、センダン、等々であった。ケヤキは歩道まで枝が垂れ下がり葉っぱにはキジラミが多数付くので歩行者には迷惑なのと、信号が見にくいと言うこともあるのかもしれない。只、中央分離帯の処では、数カ所植えてあった。

Ⅲ. 子供の頃から忘れていた産毛

事務所のベランダで事務員がプランターでミニトマトを栽培して、赤く熟したので収穫しようと思いが付いた。トマトの表面が太陽の加減で白くきらきらと輝いている。思い出した。トマトには産毛があることを。子供の頃、夏休みには裏の畑でトマトをもらって食べたが、産毛を服で拭いていた。青臭く生温いトマトだった。



畑や家庭菜園でトマトを作った方ならご存じかもしれないが、都会生まれで都会育ちの方なら知らないかも。スーパーで買うトマトには産毛が付いていない？トマトの葉っぱ、枝、実すべてに産毛がある。「道の駅」などに寄ったときに産直品を買ってみては・・・

乾燥したアンデスが原産地らしく、空気中の水分を吸収する為だとか。

以上、産毛三題

ダケカンバ（カバノキ科 カバノキ属）

3班 遊上 眞一

シラビソ・コメツガ・ネズコなどと共に、一番標高の高い場所にまで生育する高木です。
生育する場所によって様々に変化する樹形をウォッチング。
また樹齢により樹皮も変化してゆきます。
高い山に行かれた時には、是非観察して下さい。



標高 1,600m。ダケカンバの豊かな森（尾瀬沼）



森林限界に近づくとも過酷な環境を生き抜くため曲がったり、地を這ったり（光岳）



標高 2,400m の森林限界を超えると 1m の低木にしか育たない（金峰山）



天を衝く巨木に、成長（瑞牆山）



ダケカンバにオオシラビソ。水墨画の世界です（至仏山）



幼木は赤く、サクラのような皮目（北八ヶ岳）



成木になると、はがれてきます（北八ヶ岳）



老木はシルバー。枯れたよう（北八ヶ岳）

夏の風景

3 班 岩城 正大



俳句・川柳

3 班 谷坂 修二

6月の芦生

眠たげに見上げるガマに栃の花
井守2匹文字になったり離れたり
鶯が探してごらん隣から
12人囲んでも余る芦生杉
滝くぼに小さな鰻が隠れこみ



(芦生のガマ 谷坂 修二)

7月の白馬岳

雪溪もドレスに見せるチングルマ
しま禿にコマクサ見付けカメラ出し
夏登山一瞬の風ピーク見せ

自然と文化だより
皆様のご協力により30号が発行出来ました。
有難うございました。(広報委員会)